

7月25日(水)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさん アウトプットイベント 「100人ぐりっ首—英語でとる百人一首—」

1, マクミランさん作英訳百人一首カルタ

ピーターマクミランさんは、ないじえる芸術共創ラボのなかで当館蔵「扇の草紙」の英訳に取り組んでおられます。そのなかには百人一首や伊勢物語といった、マクミランさんが長年取り組んでこられた作品の一部も含まれ、教員とのWSを重ねてよりよい解釈や翻訳を試みておられます。

そういった成果を活かした百人一首の英訳を用いて、世界初の英訳百人一首カルタを制作されたマクミランさん(2018年7月時点では試作品)。これまでもアメリカ大使館などで高校生を対象に英訳百人一首大会を実施されていましたが、今回始めて立川市でも大会を開催することとなりました。

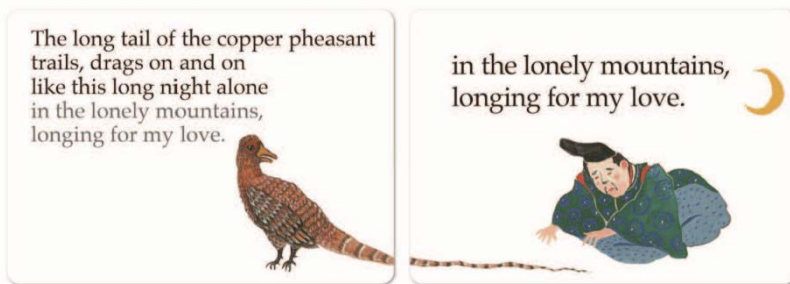
題して「100人ぐりっ首—英語でとる百人一首—」(2018年7月25日、於立川市柴崎学習館講堂・体育館、後援:立川市教育委員会)。覚えやすいタイトルだと評判上々です。

マクミランさんのカルタは、現代人にも馴染み深いトランプをイメージした形、大きさで、歌人ではなく歌の意味や世界観を表現した絵が描いてあります。読札と取札が対になっており、絵合のよう

に楽しむことができるため、英語や百人一首に自信がない、未経験だという人でも同じスタートラインから楽しめるというものです。

しかしその一方、マクミランさんの翻訳は直訳ではなく、意味をよりよくつたえるために語順を入れ替えたり言葉を補ったりしているため、練習して臨めばその分有利という側面もあります。

今回は立川市を中心とした中学生・高校生を対象として参加を呼び掛けたところ、30余名の生徒が参加してくれました。



2, 立川市でのカルタ大会

今回の会場は、体育館に六十畳の畳を敷き詰め、座敷のような空間を作りました。

7月25日(水)



大会に移る前に、和歌文学を専門としておられる神作研一先生(当館教授)より、百人一首の魅力についてお話いただきました。神作先生が持参された、江戸時代の美しい百人一首カルタに、参加者は瞬

く間に魅了されたようで、それまで緊張していた様子だった生徒たちが、カルタを近くで見ようと背伸びしている様子が大変ほほえましく感じられました。



7月25日（水）

さて、大会は全五回戦のトーナメント方式で行われました。読み上げはマクミランさんご自身が担当されます。

生徒たちは最初こそ戸惑いを見せていたものの、段々と集中が深まっていく様子が分かります。残念ながら負けてしまった生徒たちも、次のトーナメントでは固唾をのんで友達の勝負の行方を見守っていた様子が大変印象的でした。トーナメント戦に設定した際に、勝負が終わってしまった生徒が退屈するのではないかと心配もしていたのですが、杞憂に終わったようです。参加者たちはそれぞれ特訓を積んで来たようで、自分の勝敗の行方を気にするだけでなく仲間や相手にも敬意を払っている様子うかがわれました。



トーナメントが進むにつれ、札をとるペースも早くなり、勝負はどんどん白熱してゆきました。すべての試合が終わると2名の優勝者が誕生し、マクミランさんが翻訳された百人一首の本と、和歌の翻訳が記された扇とが手渡されました。



また、大会の冒頭では、慶應義塾大学かるた会のみなさんによる競技カルタのデモンストレーションが行われました。華麗な技、さすがの迫力に、思わず歓声が起こりました。

7月25日(水)



7月25日（水）

3, 参加者の声

大会終了後に、マクミランから英訳百人一首カルタをつくった意図や、翻訳に際して心がけたことについて語っていただきました。マクミランさんは参加してくれた生徒たちに積極的に意見や感想を聞いておられました。

私からも、優勝者二名と、惜しくも途中で敗退しましたが、とても楽しそうに大会に参加してくれた二名の生徒に、感想などをインタビューしてみました。

やはりみなさん部活や学校で一生懸命練習してきたとのこと。驚いたのは、百人一首が好きだという人だけでなく、英語部なので参加しましたとの声を聞いたことです。百人一首の意味を知らなくても、英語の表記や発音を手掛りに練習したとのこと。百人一首＝日本語と思っている人は、このように楽しめなかったかもしれません。勿論、百人一首も英語も好きですという人もいました。こういった意見を聞いて、古典の世界にはとても広い入口を用意することができるのだなあと感じました。

今年出場した人はさらに腕を磨いて、そうでない人にも是非関心を持ってもらい、長らく息の続くイベントになればと思います。

